

主語プロトタイプ論

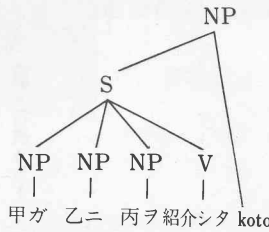
柴谷方良

一 はじめに

主語も補語の一つと考える三上章は、著書『象は鼻が長い』(九一頁)で、「甲ガ乙ニ丙ヲ紹介シタ Koto」という表現の構造は次のように「枝状をなして」いて、三つの名詞句は動詞と均等にかかわっていると分析している。



これを今様に書き直せば、下のような構造図になるであろう。以下では名詞化のための形式名詞「こと」を除外して考えるが、この三上の分析及び主語と補語を区別しないとすると、名詞句の分類には次の二つの主張が含まれている。すなわち、日本語の名詞句はすべて構文的に均一的な働きをするという



こと及び、日本語には動詞句 (VP) は必要でないという主張である。主語・目的語という文法関係を構造上から規定しようとする伝統的な変形文法においては、この二つの主張は密接な関係があるが——つまり右の構造図からは S に直接支配された NP (主語) をユニークに規定できない——一般的に考えれば必然的な関係は存在しない。たとえ、日本語には主語というもののが想定されるべきだと考えても、それが必ずしも構造的に反映されていなければならない必然性はないからである。しかしながら、ここ数年来日本語には VP があるのかないのか、つまり、日本語は階層型言語 (configurational language) である

のかどうかという問題が注目を浴びていること、及び主語が他の構文要素といかなる構造的関係において成立しているかという問題は主語を考える上で検討されなければいけないことであるという点に鑑み、本稿では日本語の主語という問題を右に指摘した三上の主張の二点を中心に考えてみることにする。

二 主語の特性

三上章(1)は、「主語は、主格が或る特別なはたらきをする国語において、その主格に認められる資格、としか考えられないものである。」「日本語においては主格は何ら特別なはたらきが見られない。従って主語というのは日本文法にとつて無益有害な用語であるから、一日も早く廃止しなくてはならぬ。」と氏の持説を説いているが、ここでは主格——つまり格助詞「が」で示される名詞句——が本当に三上のいうように、特別な働きをしないのかということを考えてみよう(2)。つまり、他動詞文などにおいては動詞とそれに対して二つまたは三つの名詞句が共起するが、これらの名詞句がすべて「補語」と一括され得るような均一的統語特性を持っているかどうかということを検討してみれば、三上の主張が正しいかどうかに分かることである。

構文を形成する名詞句すべてが同じような統語特性を持たないということは色々な現象から分かるが、ここでこれを示

す現象のいくつかを観察してみよう。まず、尊敬語と再帰代名詞の先行詞に関する現象をとりあげることにする。尊敬語化の現象とは、動詞を連用形にし、それに接頭辞「お」または「ご」を付加し、「くになる」と続ける表現であるが、これを引き起こす名詞句は特定のものでしかない。まずその名詞句が話者の尊敬に値する人を指し、その名詞句が統語的に特別なものでなければならぬ。例えば、次の三つの文のうち適切な表現と思われるのは、(7)の文だけである。

ア 先生が太郎に花子をご紹介になった。

イ *太郎が先生に花子をご紹介になった。

ウ *太郎が花子に先生をご紹介になった。

つまり、「先生」という話者の尊敬に値する人を指す名詞句が文中にあっても、常にそれが尊敬語化を引き起こすことは出来ないのである。三上のいうように、文を構成する名詞句はすべて補語であつて、特別な働きをする語は無いと考えれば、右のような状況は期待され得ないものである。つまり、もし、すべての名詞句が統語的には同等であつて、補語としてまとめられ得るとするならば、(イ)・(ウ)の「先生に」も「先生を」も(7)の「先生が」同様に、尊敬語化を引き起こすことが予想される。もち論、右の状況はこれに相反して、主格助詞「が」を伴う名詞句が尊敬語化の現象において特別な働きをしていることを示すものである。

全く同様の状況が再帰代名詞の解釈についても見られる。

つまり、再帰代名詞「自分」の先行詞となり得る名詞句も、特定のものだけである。例えば、次の文で、「自分」の先行詞として働き得るのは、主格名詞句「太郎が」だけである。

太郎が花子に次郎を自分の家で紹介した。

(自分＝太郎、自分＋花子、自分＋次郎)

二つの文を等位的に結びつけると、二番目に繰り返される名詞句は、次に見られるように省略されるのが普通である。

太郎がやって来た。太郎が挨拶した。

↓太郎がやって来て、 ϕ_i 挨拶した。

このような等位構文の ϕ を、解釈という立場から考えてみると、ここにもやはりあらゆる名詞句が同等の文法的役割を果たしているとはいえないということが分かる。まず、先行詞の問題から考えてみると、次の文で明らかのように、 ϕ の先行詞には特定の名詞句、つまり主格の名詞句しか働き得ないことが分かる。

姉が弟を叱って、 ϕ_i 泣いた。

右の文では ϕ は弟を指すと解釈できないが、次の文では ϕ は弟と解釈されることから、やはり、名詞句が主格に立つかどうかが問題となっているということは明らかである。

弟が姉に叱られて、 ϕ_i 泣いた。

同様のことが ϕ の起り方からも分かる。右の例では、 ϕ は主格名詞句の来る位置に起こっているが、次の例からはやはりどのような名詞句の位置にも起これるのではなく、

主格名詞句の位置に限られているということが分かる。

ア *子供が遊んでいて、母親が(ϕ_i)を叱った。

イ 子供が遊んでいて、(ϕ_i)が)母親に叱られた。

(ア)の文は ϕ を「子供」と解釈することも不可能ではないが、これは統語的な要因によるのではなく、一般的な状況判断からそう推定される類のものである。特に(ア)では ϕ が子供以外の者を指すことも可能であるが、(イ)では ϕ の解釈は「子供」だけに限られるという点に注意されたい。

英語の、不定詞を従える want は、その主語と不定詞によつて表わされる行為の主体とが一致していても、していなくてもよい。それぞれが一致していれば、次の(ア)のように不定詞の主体が ϕ となり、一致していなければ(イ)のように不定詞の主体が起こる。

ア I want ϕ_i to go.

イ I want John to go.

日本語の場合には(ア)と(イ)の状況では、それぞれ異なった述語が使われ、次のように言い表わされる。

ア 僕は(ϕ_i)が)行きたい。

イ 僕は太郎に行つて欲しい。

(ア)の文のように「たい」の主体と意味の上から判断される、「行く」の主体が同一の場合に「くたい」の表現が起こるのであって、「僕は太郎が行きたい」と言えないように、二つの主体の同一性が問題となっている。しかし、「くたい」の構文を用いるには、同一性を持つ主体がどのような統語的位置に

起こっていてもいいというわけではなく、次のような文は非文である。

*僕は先生が僕を／(phiを)ほめたい。

右の文の意図するところを正しい文で表わすためには、次のように、同一主体が主格の位置に来るような構文に立て直さなければならぬ。

僕は(phiが)先生にほめられたい。

このことから、「が」で示される名詞句と「を」で示される名詞句とは同一の働きをしないことがわかる。

次に、所有を表わす「の」を「が」で置きかえて言うことが出来る。例えば、

ア 太郎の鼻が低い。

イ 太郎が鼻が低い。

右の(ア)と(イ)は、意味的なニュアンスは違っているが、ここで問題としたことは、このようなニュアンスの違った言いかえが、どのような名詞句に含まれる「の」にも適用されるのではない、ということである。次の二文から分かるように、「が」で示された名詞句内の「の」は「が」で言いかえられるが、「を」で示された名詞句内の「の」はそのような言いかえを許さない。

ア 警察が「真紀子さんの／*がお父さんを」汚職でつかまえたんですよ。

イ 「真紀子さんの／がお父さんが」警察に汚職でつかま

えられたんですよ。

このこともまた、文を構成する名詞句がすべて同一の働きをしていないということを示すものに外ならない。

最後に、恣意的なゼロの代名詞 (arbitrary PRO) の起こり方を検討してみよう。「人々」とか「どのような人でも」とか任意の人を指す場合には日本語でも英語でもゼロの形式をとる。

ア (PROが) 本を読むことはいいことだ。

イ PRO to read books is a good thing.

しかし、このような PRO が起こり得るのは主格名詞句の位置に限られていて、対格その他の位置には一般的に起こることは出来ない。(例外については次節参照のこと)

ア *子供が (PROを) 尊敬することはいいことだ。

イ *僕は一生を (PROに) 捧げた。

またもや、主格名詞句(の位置)は他の名詞句(の位置)と同等の働きをしていないことが分かった。

以上の観察で明らかのように、文を構成する名詞句はすべて均質的な統語特性を帯びていない。つまり、ある特定の名詞句——以上の観察では主格名詞句——が他の名詞句よりも統語現象により優先的に関与するということである。「主語」という概念をこのように、種々の統語現象に対して他の名詞句よりも優先的に関与するもの、というように捉えることが可能である。すなわち、文を構成する名詞句の中には統語的

に特別な働きをするものがある。この名詞句を「主語」と呼ぼうというのである。見方を変えて述べれば、「主語」とはあの種の統語的特性を備えた名詞句というように特徴づけることができる、ということである(3)。

ここで、日本語の主語を右のような立場から特徴づけられれば、以上で観察した諸現象に関連した特徴及びその他の特徴を、次のようにまとめることができる。

日本語の主語の統語特性(4)

- ① 格助詞「が」で示される。
- ② 基本語順で文頭に起こる。
- ③ 尊敬語化を引き起こす。
- ④ 再帰代名詞の先行詞として働く。
- ⑤ 等位構文において ϕ となったり、 ϕ の先行詞として働く。
- ⑥ 主文と補文において同一名詞句が要求される構文では、補文の ϕ となる。
- ⑦ 「の」と「が」の交替を許す。
- ⑧ 恣意的なゼロの代名詞がその位置に起こる。

以上のような観察に基づけば、日本語の主語は、特性①から考えても、主格名詞句であって、何も「主語」と呼ばずに、「主格」と呼ばばいいではないか、という結論を導き出すことが出来る。事実、三上章は、「主語」という用語を「主格」で置き換えよ、と力説していたのである。また、三上は「主

格」の相対的優位は認めているので、我々の観察とは相反しない立場である、と結論づけることも可能である。ところが、現実には、我々が主語と見做すものを「が」で示された名詞句、つまり主格(の名詞句)という具体的なものでは置き換えられないのである。このことは、「が」で示されている名詞句がすべて均一的な統語特性を帯びないこと、及び「が」で示されていない名詞句でも主語の特性を持つものがあるということから導き出される結論である。以下ではこれらの状況を観察してみよう。

三 プロトタイプ論

今まで取り扱ってきた現象は普通の文、つまり主語が主格助詞「が」で示され、目的語が対格助詞「を」で示される文を中心に観察してきたが、日本語には(そして多くの外国語においても)構文分析上少々やっかいな次のような文型がある。

- ア 太郎に英語がわかる／できる(こと)
 - イ 太郎に英語が話せる(こと)
 - ウ 太郎にお金がある(こと)
 - エ 太郎にお金が必要な(こと)
- また、次のように主格で示される名詞句が二つ現われる構文もある。

- ア 太郎が花子が好きな(こと)
- イ 太郎がこの本が欲しい(こと)

ウ 君が水が飲みたい(こと)

三上章の言うように、主語を主格と呼べば、そして主語という用語をとる立場からすれば、最初の「に」が「文」(「与格構文」と呼ぼう)では、「英語が」・「お金が」が主語と見做され、「が」が「文」(「二重主格構文」)では、主語が二つあると考えなければならぬ。これは、主語という語を廃止して、主格と呼ぼうとする三上の持論を裏返して解釈した場合の当然の帰結である。しかし、右にあげたそれぞれの主格名詞句を検討してみると、それらにはずい分違った統語特性があることがわかり、それらを一律に主語(または主格)というカテゴリーで捉える分析に不都合があることが分かる。

まず最初に与格構文を考えてみよう。三上章が主格の絶対的優位ということを言わず、主格は第一の格であるが、他の格に対しては相対的な優位性しかない、と判断した背景には次のような現象がある⁵⁾。つまり、前節で観察した尊敬語化現象は、主格名詞句だけでなく、次のように、与格構文では、「に」で示される名詞句によっても引き起こされるのである。

- ア 先生に英語がおわかりになる(こと)
- イ 先生にお金が沢山おありになる(こと)
- ウ 先生に本が沢山ご必要(こと)

右の(ウ)の文から分かるように、述語が形容詞や形容動詞の場合には、尊敬語化は、接辞「お」(「ご」)だけを付加する。この現象はまた次の二重主格構文などでは、最初の主格名詞句

だけが主語の特性を帯びていることを示す。

- ア 先生が花子さんがお好きな(こと)
- イ *私が先生がお好きな(こと)

つまり、先の(ア)と右の(イ)によって、「に」で示される名詞句でも主語のような働きをするものがあつたり、「が」で示されていても主語の働きをしない名詞句があるということが分かった。同様のことが再帰代名詞の解釈その他からも分かる。

例えば、次の文では「に」名詞句が再帰代名詞の先行詞となつていて、「が」名詞句はそのような働きはしていない。

太郎には花子が自分の妹よりもよく理解できる

(自分₁太郎、自分₂花子)

二重主格構文でも、二番目の主格名詞句は再帰代名詞の先行詞とはなり得ない。従つて、次の文では、「自分」は「太郎」としか解釈できない。

太郎が花子が自分の妹より好きな(こと)

(自分₁太郎、自分₂花子)

また、先に考えた「くたい」構文における制約に関しても「に」で表わされる名詞句によつて満足させられるということが次の文から分かる。

私は(φ_i)貴方の気持ちが分かりたくつて……。

普通は主語の位置に起こる恣意的なゼロの代名詞も、ここに取り上げられている与格の名詞句の位置に起こつたり、二

重主格文の最初の主格の位置に起こったりする。

ア (PROに) 外国語がわかることは素晴らしい。

イ (PROが) 子供が好きなのはいいことだ。

しかし、第二番目の名詞句の位置は、「が」が起こるにもかかわらず、問題の PRO は起こり得ない。

ア *君が (PROが) 信じられないのは悲しいことだ。

イ *君が (PROが) 好きなのはいいことだ。

以上のことから、与格構文では与格名詞句が主語の統語特性を帯び、二重主格構文では最初の主格が主語の働きをするということと共に、これらの構文では二番目の名詞句が、「が」で示されているにもかかわらず、主語的でないとということが分かった。つまり、日本語の名詞句のなかには「太郎が走った」や「太郎が次郎をなぐった」の「太郎が」のように典型的なもの、与格構文の与格名詞句のように、一見主語でないようなものが主語としての統語特性を持っていたり、与格構文の主格名詞句や二重主格構文の二番目のもののように、一見主語のように見えて、実は統語的には主語の働きをしない名詞句があるということである。言いかえれば、典型的な主語・主語らしくない主語・主語のような非主語があるということである。

このような状況は、カテゴリゼーションで一般的に観察されるもので、多くの物事がAまたはBというように明確に分類できず、中間的なものが存在するという状況である。プロ

トタイプ論というのは、このような、アリストテレスなどによる分類の古典的理論、つまり、カテゴリーのメンバースhipは必要かつ十分条件を満たすことによつて決定されるものであるものでは捉えられない状況に対処するためのものである(6)。特に、我々にとつて関心があるプロトタイプ論の局面は、あるカテゴリーのメンバースhipにはプロトタイプ(原型)的なものと、それから少しはずれる、つまりプロトタイプを特徴づける要因の、あるものが欠けていたりするメンバースhipがあり得る、という点と、カテゴリーの間には明確な区別がなく、連続的なものになっている場合が多くあるという点である。具体的な例をあげてみよう。

湯呑とコーヒーマッグを想像して頂きたい。一般的には種々の形をした器を与えられた時に、それらが湯呑に分類されるか、コーヒーマッグとして分類されるかの判別は簡単なものである。把手がついていなくて蓋がついていれば、湯呑み、そして把手がついていて蓋がついていなければ、コーヒーマッグと分類するであろう。ところが、この中間的なものもある。最近日本でも出回り始めた、中国製の器である。これには把手も蓋もついていて、形状からだ、と湯呑に分類されるべきか、コーヒーマッグに分類されるのかは判断がゆれるところである。蓋のある点は湯呑的であるし、把手のある点はコーヒーマッグ的である。(現実の分類に際しては用途も考慮されるので、問題の器は中国茶を飲む為のものであるから湯呑に分類され

るかも知れない。もち論、コーヒーを飲んでもさしつかえはない。

先の日本語の主語の問題をプロトタイプ論的に考えれば、前節の終わりにあげたような統語特性をすべて備えた名詞句は、日本語主語のプロトタイプのものと言える。一方、与格構文の与格名詞句は、主格でなく与格表示をうけているという点において、プロトタイプから少しはずれた主語ということになる⁽⁷⁾。一方、与格構文の主格名詞句や二重主格構文の二番目の主格名詞句は、主格で示されているという点は主語のプロトタイプと相通じる点はあるが、その他の点では主語と呼べないものである。時枝誠記がこのような名詞句を主語とも客語(目的語)とも見做さず、別のカテゴリー「対象(格)」として捉えたのは、それらが主語・目的語のどちらにも百パーセント属さないからである。

今までの考察では、時枝のいう対象語は「が」で示されているという点以外は主語的でないということを見て来たが、それらを目的語(つまり、主語の特徴をいく分か持った非プロトタイプの目的語)として見做せるかという点について考えてみよう。この点に関しては、対象語も対格目的語もプロトタイプの主語の特性の多くを共有しないという否定的な共通点が見られるということは今までの考察で明らかであるが、以下ではこれら二つのタイプの名詞句が統一に取り扱われる肯定的な根拠を探ってみる。

久野暉『日本文法研究』によれば、日本語の助詞で、会話

文などで省略しやすいのは、「は」と「を」であって、「が」は省略されにくい、とされている。例えば、次の(7)で省略されているのは、「は」及び「を」であって、「が」の省略を伴う(イ)の文は少しおかしい、ということである。

ア あなたが何を読んでいるの？

イ 誰が来た？

右の観察を言いかえれば、題目及び目的語の助詞は省略しやすいが、主語の助詞は省略しにくいということである。このことから、もし与格構文の対象語の「が」が目的語の「を」と同じように容易に省略されれば、それらは、目的語と同じ構文特性を持つということがわかる。現実には、次のように、対象語の「が」は自由に省略することが出来る。

ア 君が英語がわかる？

イ あんたが誰が好き？

また、右の(イ)の文は主語の「が」と対象語の「が」とは省略上の違いがあるということを示す好例文である。(この文及び以下の文が大阪弁的表現であるのは、それが筆者の直感をより適格に反映しているからである。読者の母方言に直して考察されたい。ただし、東北地方の方言では、主格助詞は一般的に省略されるので、このテストは適用できないかも知れない。)

(イ)の文で省略されている助詞は「は」と「が」であって、解釈は Whom do you like? である。今この文を次のように直してみると、読みは、やはり Whom do you like? であっ

て、Who likes you? とはならないと思われる。

誰があなたが好き?

つまり、右の文は次の(ア)の省略文と理解され、(イ)のものは理解しにくいということである。

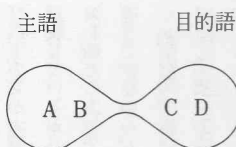
ア 誰があなたは好き?

イ 誰があなたが好き?

(ア)の「誰が」を目的語と解し、それと「あなたは」の題目の「は」を省略するという理解においては、主語の「が」は省略しない方がいいという一般的な法則には何ら触れない。一方、(イ)の文から「誰あなたが好き?」を得るためには、主語「誰が」の助詞を省略しなければならない。したがって、このような関係づけは避けられるということである。

右のことから、二重主格の二つの「が」は省略に関して違った取り扱いをうけるということが分かると共に、二番目の主格名詞(対象語)は対格目的語と同じように取り扱われているということが分かる。つまり、対象語と呼ばれる名詞句には対格目的語に通じる肯定的な統語特性が備わっているということである。

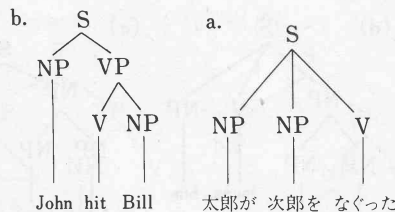
以上観察してきた点をプロトタイプ論的に図示すれば下のようになる。すなわち、主語・目的語というカテゴリーは明確に分離したものでなく、連続的であり、A及びDに位置するそれぞれのカテゴリーの原型的なものがあり、その中間に位置するものもあるということである。与格構文の与格名詞



句はBの地点、そして対象語と呼ばれる名詞句は、Cの地点に位置していると言えようか。いずれにしても、三上章の言うように、主語を主格で置きかえるという考え方は、統語的に異なった働きをする主格名詞句をひとまとめに捉えたり、主格主語と同等の働きをする与格名詞句を全く別物として取り扱ったりする好ましくない分析を生み出すことになる。本稿で考えたように、「主格の表示すなわち主語」という見方をせず、主格表示も主語の一特徴と見做し、主語を多くの統語的・意味的(本稿では考えなかつた特性の集合体として捉える方法)によって、初めて主語とはどのようなものであるのか、また与えられた名詞句がどのような点で主語的であり、どのような点で主語的でないのか、という点が明らかにされ得るのである。

四 日本語の階層性について

本稿では、主語とは種々の統語現象にユニークなかかわり方をする名詞句という観点から特徴づけてきたが、この、他の名詞句に比べて優位的に統語上の働きをする主語の地位が構造上に反映されているのかどうかということは興味深い問題である。最初に述べたように、三上章は、我々が主語と呼ぶ名詞句も他の名詞句も、述語に対して同格のかかわり方をしていると分析した。つまり、次の(a)図のような構造が日本

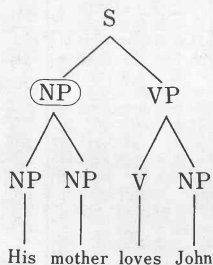


語文の構造であると考えていたわけである。一方、英語の構文に関しては、伝統的な変形文法では(b)図のような分析が提唱されてきた。つまり、英語では、目的語が動詞と共にVPを成し、主語はそのVPと共にSを形成しているという状況であるのに比べ、日本語では、主語も目的語も文構成に関して同等のかかわり方をしていると分析されている。このような構造上の違いを、「階層性」(configurationality)という概念で捉え、英語のようにVPを形成する言語を階層型言語と呼び、(a)のような平坦な構造を持つ言語は非階層型言語と呼んでいる。三上章の分析によれば、日本語は非階層型言語ということになるし、そのような分析が一般的に支持されてきた(8)。つまり、日本語では、主語の優位性は構造上に反映されていないとされてきた。ところが、つい最近、日本語も階層型言語であると主張する研究が発表されてきたので、それらのうちSaito (1985) を中心に紹介することにする(9)。

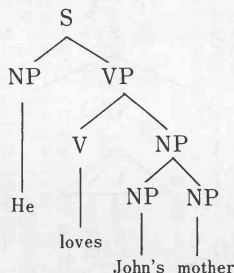
英語の代名詞とその先行詞の関係には構造的な関係が密接にかかわっているとされている。まず、次の例文を見てみよう。

ア John loves his mother.

(b)=(エ)



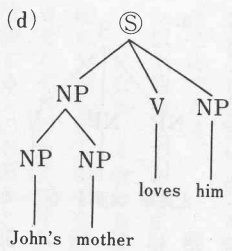
(a)=(イ)



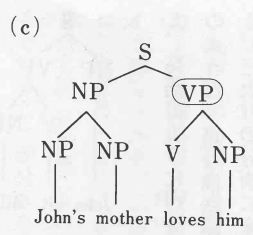
イ * He loves John's mother.
ウ John's mother loves him.
エ His mother loves John.
(イ)の文以外ではすべて John/John's と he/his が同一指示の関係にあると理解できるが、(イ)はそのような解釈を許さない。この状況は次の、代名詞とその先行詞の関係に関する制約で説明することができる。

代名詞はその先行詞をc-統御してはならない。
c-統御とは、ある節点AとBがあり、それらはお互いに支配せず、どちらかを支配する最初の枝分かれ節点、が他を支配する状況をいう。(イ)と(エ)の構文を見ながら、説明してみよう。

図(a)では、heを支配する最初の枝分かれ節点はSで、そのSはJohn'sを支配する。つまりheはJohn'sをc-統御する状況になっている。従って、heはJohn'sの先行詞となり得ない。一方、(b)図では、代名詞hisを支配する最初の



日本語にもVPがある、つまり日本語も階層型言語であるとする Saito



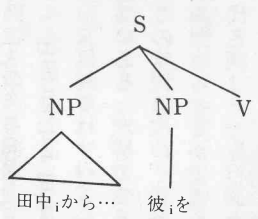
これは先行詞「John's」を支配している最初の枝分かれ節点Sが「John's」を支配していることになり、代名詞が先行詞をc-統御している状況になつてしまひ、これらは同一指示の関係を持たない、と誤つた予測をしてしまうことになる。

枝分かれ節点は丸で囲まれたNPであるが、それは先行詞 John を支配していない、つまり代名詞 his は先行詞 John を c-統御していない。よつて、(c)の文では John と his の間に先行詞—代名詞の関係が成立し得るわけである。

右の説明を生かすためには、英語においてVPがなければ困るといふことが(ウ)を見れば分かる。(ウ)の文の構造図はVPがあれば(c)のようになり、VPがなければ、(d)のようになる。

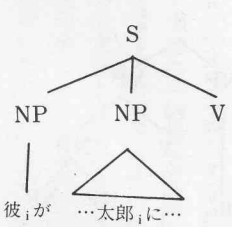
(c)図では代名詞 him を支配する最初の枝分かれ節点はVPであつて、それは先行詞 John's を支配しない。従つて、him は John's を c-統御しないので、これらを先行詞—代名詞の関係で結びつけることが出来、正しい予測が成り立つ。一方、英語がVPを持たずに、(d)図のような構造をしているならば、him を支配している最初の枝分かれ節点Sが John's を支配していることになり、代名詞が先行詞をc-統御している状況になつてしまひ、これらは同一指示の関係を持たない、と誤つた予測をしてしまうことになる。

(b)=(ウ)



(c)と(d)のように構造的な違いが得

(a)=(イ)



これらの文で問題となるのは、(イ)と(ウ)の対立である。もし、日本語にVPがなければ、(イ)も(ウ)も、上の(a)(b)のような構造になり、両方において代名詞が先行詞をc-統御することになる。これでは、(ウ)が文法的で(イ)が非文法的であるという違いが説明できなくなる。しかし、もし日本語にもVPがあると仮定すれば、(イ)と(ウ)の間には次の

等は、右と同じような状況が日本語にもあてはまることを示し、先行詞と代名詞の関係を統一に取り扱うためには日本語にもVPがあると分析した方が良く結論している。問題となる日本語文は次のようなものである。

ア 太郎が「花子が彼に送つた手紙」をまだ読んでいない (こと)

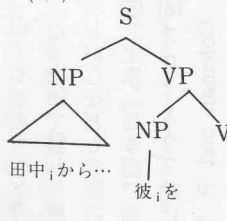
イ *彼が「花子が太郎に送つた手紙」をまだ読んでいない (こと)

ウ 「田中から金をもらった人」が彼を推薦した (こと)

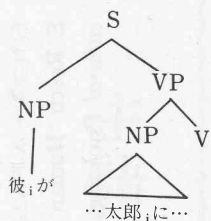
エ 「彼から金をもらった人」が田中を推薦した (こと)

点や、それが働くのは統語構造においてなのかという点などが問題となっている。例えば、VSO語順の言語などのように、VPが統語的に成立しないような言語でも、右に見たような代名詞と先行詞の関係が見られれば、c統御という概念による説明、またはそれが統語構造において働くということは疑わしくなってくる。このような問題が残るにしても、現段階では Saito 等が提示した現象は、日本語の階層性に関する一つの重要な課題ということになる⁽¹⁰⁾。

(d) = (ウ)



(c) = (イ)



られ、(c) (イ)では代名詞が先行詞をc統御している状況となるが、(d) (ウ)では代名詞は先行詞をc統御していない状況が得られる。このことから、(c) (イ)は非文法的であり、(d) (ウ)は文法的である、と説明することが可能になる。以上が Saito 等の、日本語にもVPがあるとする議論の一端である。代名詞とその先行詞の関係についての研究にはまだ多くの問題が残されていて、上の議論の評価はたやすくしない。特に、c統御という概念を拠とするのか、という

平林文雄 著 国語学研究論考

本書は国語学の研究領域の中から自らの興味を赴くままに問題の所在を追求し、その解明を志したものであり、範囲を限定してその中で所在りの問題意識の下に僅かなりと新分野を開拓したいと意図して執筆したものであつて、十篇の論文と七篇の附録資料とからなる。その対象としたもの研究の方法を明らかにすることに主眼があるところであり、そこに本書を敢て「研究論考」と題した所以がある。

● 内容目次 ● 第一章・特殊語彙の消長 ①接尾語「げんき」- 寛書 第二章・音韻の変化関係 ②ウ音の縮約現象 ③拗音の重音化現象字説 第三章・訳語の語誌研究 ④美術(新造語) ⑤芸術(再生語) ⑥美学(新造語) ⑦国家(再生語) ⑧想像(再生語) ⑨文脈(新造語) ⑩芸文(新造語) ⑪文藝(新造語) ⑫芸術作品における方言の使用 第五章・作品用語の総体研究 ⑬小野篁集と草物品語の比較 ⑭両本の比較研究 ⑮付録 ⑯小野篁集・草物品語 ⑰小野篁集校本文 ⑱小野篁集翻字本文 ⑲草物品語甲乙両本対校本文 ⑳小野篁集翻字本文 ㉑小野篁集假名字母索引 ㉒小野篁集校本文 ㉓假名字母索引 ㉔三本使用假名字母数量一覧表 ㉕索引 ㉖あとがき

● 研究叢書 ● A5 上製箱入・三二〇頁・定価八〇〇円

小高 恭 著 お湯殿の上の日記の基礎的研究

I お湯殿の上の日記本文私註(統語書類従完成会本全十一冊を対象とする) II お湯殿の上の日記本文考異 一、女房詞の研究 二、女房詞の研究 三、日本国語大辞典 四、日本国語大辞典 五、女房詞の考 六、女房詞の考 七、女房詞の考 八、女房詞の考 九、女房詞の考 十、女房詞の考 十一、女房詞の考 十二、女房詞の考 十三、女房詞の考 十四、女房詞の考 十五、女房詞の考 十六、女房詞の考 十七、女房詞の考 十八、女房詞の考 十九、女房詞の考 二十、女房詞の考 二十一、女房詞の考 二十二、女房詞の考 二十三、女房詞の考 二十四、女房詞の考 二十五、女房詞の考 二十六、女房詞の考 二十七、女房詞の考 二十八、女房詞の考 二十九、女房詞の考 三十、女房詞の考 三十一、女房詞の考 三十二、女房詞の考 三十三、女房詞の考 三十四、女房詞の考 三十五、女房詞の考 三十六、女房詞の考 三十七、女房詞の考 三十八、女房詞の考 三十九、女房詞の考 四十、女房詞の考 四十一、女房詞の考 四十二、女房詞の考 四十三、女房詞の考 四十四、女房詞の考 四十五、女房詞の考 四十六、女房詞の考 四十七、女房詞の考 四十八、女房詞の考 四十九、女房詞の考 五十、女房詞の考 五十一、女房詞の考 五十二、女房詞の考 五十三、女房詞の考 五十四、女房詞の考 五十五、女房詞の考 五十六、女房詞の考 五十七、女房詞の考 五十八、女房詞の考 五十九、女房詞の考 六十、女房詞の考 六十一、女房詞の考 六十二、女房詞の考 六十三、女房詞の考 六十四、女房詞の考 六十五、女房詞の考 六十六、女房詞の考 六十七、女房詞の考 六十八、女房詞の考 六十九、女房詞の考 七十、女房詞の考 七十一、女房詞の考 七十二、女房詞の考 七十三、女房詞の考 七十四、女房詞の考 七十五、女房詞の考 七十六、女房詞の考 七十七、女房詞の考 七十八、女房詞の考 七十九、女房詞の考 八十、女房詞の考 八十一、女房詞の考 八十二、女房詞の考 八十三、女房詞の考 八十四、女房詞の考 八十五、女房詞の考 八十六、女房詞の考 八十七、女房詞の考 八十八、女房詞の考 八十九、女房詞の考 九十、女房詞の考 九十一、女房詞の考 九十二、女房詞の考 九十三、女房詞の考 九十四、女房詞の考 九十五、女房詞の考 九十六、女房詞の考 九十七、女房詞の考 九十八、女房詞の考 九十九、女房詞の考 一百、女房詞の考

● 研究叢書 ● A5 上製箱入・三六八頁・定価一一、〇〇〇円

国語・国文学 和泉書院
千543 大阪市大正寺区上之宮町7-16
電話06-771-1467 振替大阪715043

注

- (1) 三上章『現代語法序説』七三—七四頁。
- (2) 三上章の主語廃止論のより詳しい検討及び反論については、拙著『日本語の分析』(大修館書店)及び『Mikami Akira and the notion of 'subject' in Japanese grammar』*Problems in Japanese Syntax and Semantics* (Kaitakusha) を参照されたい。
- (3) 終局的には、統語特性だけでなく、意味特性及び、語用論的特性なども主語の特徴づけには必要となつてくる。
- (4) これら以外にも「主語の繰り上げ」の対象となるなど、いくつかがの考えられるが、ここでは省略する。また、次節で触れる現象、つまり格助詞の省略に関するところがらなども参照のこと。
- (5) 三上章『日本語の論理』一七二—一七三頁。
- (6) プロトタイプ論による意味分析の例としては、L. Coleman and P. Kay "Prototype semantics: The English word *LIE*" *Language* 57: 1 (1981) がある。カテゴリゼーションに関するプロトタイプ論については、E. Rosch "Human categorization" *Advances in Cross-cultural Psychology* (Academic Press, 1977) など参照のこと。

こと。

- (7) 「に・が」という格の分布を持つすべての文が本稿で取り扱った与格構文の特性を持っているわけではない。ある構文では、「に」ではなくて「が」で示されている名詞句が主語として働くという点、つまり他動詞的な与格構文と自動詞的な与格構文の存在については、拙稿 "On the transitivity of the stative predicate constructions" S.-Y. Kuroda (ed.) *Proceedings of the La Jolla Japanese Syntax Workshop* (forthcoming) を参照されたい。
- (8) 井上和子『変形文法と日本語』(上) 四一—四五頁、柴谷方良『日本語の分析』A. K. Farmer *Modularity in Syntax* (MIT Press 1984) など参照のこと。
- (9) M. Saito *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications* (MIT Ph. D. thesis 1985) 及び J. Whitman "Configurationality parameters" (Harvard University ms. 1982) など参照のこと。
- (10) 本研究は、文部省科学研究費特別推進研究「日本語の普遍性と個別性に関する理論的・実証的研究」(代表井上和子)の助成を受けて進められた。

(しはたに・まさよし 神戸大学助教授)

日本語学

10月号

1985 VOL. 4

昭和六十年十月十日発行(毎月一回十日発行)第四卷第十号十月号
 昭和五十九年十二月十一日国鉄首經特別扱承認雑誌第七九三九号
 昭和五十八年一月十八日第三種郵便物認可

特集 主語論

- 主語プロトタイプ論……………柴谷 方良
 主語的なる現象……………内田 賢徳
 主語・主格・主題……………尾上 圭介
 ぬし
 主格の優位性……………仁田 義雄
 —伝達のムードによる主格の人称指定—
 〈ナリ述語〉と〈タリ述語〉……………鈴木 泰
-
- 受身についての久野説を……………黒田 成幸
 改釈する—一つの反批判—

《連載》

- 現代文章講義(三) 饒舌という思想(続) ……野口 武彦
 —高見順「故旧忘れ得べき」—
 日本語学者列伝 時枝誠記伝(5)……………鈴木 一彦
 音とことば 狂言の鳥声(1)—ニワトリ……………山口 仲美
-
- 新刊自己紹介 修士論文要旨紹介

明治書院